
異世界にきちまつた俺！！

バン・レオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界にきちまつた俺！！

【Zコード】

Z7311

【作者名】

バン・レオン

【あらすじ】

一人の青年が、神によって死に、神によって異世界で生き返った者の物語。

神に殺された青年（前書き）

初めて書きます。不定期で更新していくかも。下手だと、思いま
すがよろしくお願ひいたします。

神に殺された青年

「 酷く寒い、空間にただ一人で、立っていたのだ。

「なんじゃここ！？」『おい、聞こえているか？、齊藤 剣仁』
声がした、方に向いて見ると、白ひげを伸ばし、グレーのコートを
着た、爺がいた。

「誰だ、お前？　何で俺の名前を知っている。それに、ここは、ど
こだ。」

警戒して聞いた。

『わしは、神じゃ』は、（・・・・）
えと、なんかのギャグか？

『おい、わしを馬鹿にするでは、ない』何で解った（・・・・）
『貴様の考えは、わかるわい』とドスの聞いた声で言つた。怖く
え（^ー^・）

「じゃ何で、その神様がいんだ？てか、ここは何処だ！..」

『ここは、天国と地獄の間じゃ

は？（- - - -）

「じゃ、俺は、死んだのか？」

『ああ、そうじゃ、お主は、死んである。』

「ちょっと待て、何で俺は、死んだんだ？」

『それは～』

「早く、こ・た・え・ろ」（^ー^）ドスを聞かせて言つた。

『解つた、解つたそれは、わしのせいじゃ』

「あ～、何でだ、簡潔に答える」

『それは、お主の寿命を書いた、紙をシュレッタにかけてしまつ
たからじゃ。』

は？（- - - -）

「ふざけるな。おい、くそ神俺を今すぐ生き返せ！..」

『無理じゃ、一度死んでしまったのは、生き返せぬのじゃ。すま

ん

「今すぐ、生き返すか、死ぬかを選べ」 ドスの聞いた声で言いながら、近づいた。

『ヒィ、ま待て、異世界なら、生き返せるだぞ』

「おい、それは、漫画の世界でもOKだよな、そうだろ」

『ああそじや、漫画の世界でもOKじやぞ、それにいくつか能力を『えよつ』『ひよつ』俺は、よしあとかんじた。』

「んじや、世界は、ネギまの世界で、能力は、武術などを達人の域にできるように、様々な銃を使えるように、無限の弾薬など」

ウキウキ（<—>）

『おいおい、待て銃は、なんにするんじや、それに無限の弾薬は、なんじや？』

めんどくせいな、まついか。

「銃は俺がイメージしたのだ、後、無限の弾薬は魔弾など、後は、

魔眼（先読みの目など）な

俺、ちよつとチートじやねえ。

『ふむ〜、少し心細いな？

そりじや！お主にナギの魔力の2倍、ぐらいうるカカンの気の2倍

ぐらいうる『えよつー！』

は（ - - - -)

「あの〜、それだと魔力と気の知識を下さいよー！」

『OKじやぞ。』

「それじゃ、容姿は、リボーンの口ロネロ10年後の姿で」

『ほい、これでどうじや、後お主に真相の能力を付けておいたぞ。んじや行つてこい』

足の下の空間が消えて落とされたのだ。 「く、いや———— あ
の、くそ神——覚えてる————」

異世界に本郷はいためられた！！（前書き）

では、第2話こもます。

異世界に本郷はあがめつた！！

「なんじゅうじゅう…？」

何で俺は、パラシュートなしで空を落としてんだ！？

『おーい、聞こえてるか？』

「おーい、このくそ神何で俺は、こんなことになってるんだ…！」

『いやー、転送する場所を間違いちまつたから。本当にすまんの～』

「嘘ー、早く何とかして…！」

『おーい、後お主にもうひとつ能力を付けといたぞ。その能力は、漫画などの武器・技などを使えるようにしといたぞ、その名は、空想現実変換じや』

(・。・)

『えーと、その能力は、とある魔術の禁書目録のイノケンテウスやドラゴン・ブレスなんかを現実にすること？』

『そうじやー、んじや後がんばー、それと時代は、ナギが紅き翼を使った時じや』

「やつたぜー」そのまま、落下していく剣仁だった。

プロフィール

名前： 斎藤 剣仁

能力：仮想現実変換
（漫画などの武器・技などを使える
チートの能力）

魔眼（先読みの目・千里眼など）

無限の弾薬（そのままの意味）

性格：めんどく下がりやだが、仲間や知り合には、優しいが、敵
には、死を与える（戦闘時は、たまにバーサーカー状態になる）

主な武器：デザートイーグル（各種弾頭を使えるように改造してある）

H & K U S P（ドットサイト・マガジン増量付き）
L96A1（剣仁仕様）
アスカラロン（インデックス）
バスターソード（ffの某キャラの）

魔法・魔術：魔法は、火 風 雷 閻 系が得意

魔術は、イノケンテウス・ドラゴンブレスなど（ほとんど、インデ
ックスの）

奴らにあつて

「まだに、落下していく剣仁」「いくぜ！！」リボーンのザンザスが使った銃ザートイーグルと弾を現実に出したのだ。

「イッヤッハ〜、空を飛んでるぜ…！さてと！」は、どじだ？」「ん？向いから音があるな？。行つてみるか。

（ナギサイド）

「へ いくぜ！」

「うおっ たくさんだと！？」

（ドウツ）

ナギがたくさん！？ てかあれで、ラカンか？？ てことは、ラカンがナギ達にケンカを売つた時か！？

（ドカン）

「くつ？」

今、顔のすぐ横を剣が通つたよな。

（ブチツ）

「あ〜い〜つ〜ら〜ここで殺す 殺す！！」

両手にデザートイーグル（ザンザス機能）を持ちナギとラカンに肉薄してつた剣仁だった。

（アル・ゼクトサイド）

ナギとラカンの戦いを観戦していると一人の少年が乱闘の中に入つ

ていたのです。

「おや？ゼクト　あの少年は、何者ですか？」

「ふむ、わしも今きずいたところじゃぞ」

ドカン　ドカン

ガガガガガガガガガ

「おや彼は、ナギとラカンの相手をしながら戦っていますね」

「そうじゃな、ん　あの技は、なんじゃ？」

（ナギ・ラカンサイド）

なんだあのガキは、銃を構てるが？。ガガガガガガガガガ　な

なんだあの技は、そこらへんの大地が、削られてるぞ！？。

俺は、紅き翼を潰そうと戦つている最中にあのガキが入つて来たんだ。俺でもあの技を食らつたら、ただじゃないと感が、叫んでる！？。

（剣仁サイド）

「てめえ～らの攻撃が、俺にかすつただろうが！！」

声を荒げて言いながら奴らに憤怒の炎で攻撃していった。

（13時間後）

やつべー、やり過ぎたか？周りがスゲーことになってるし。まあ、あいつらだって、千の雷やら、やつべーのを連発してたからいつか。

「お~い、あんたら大丈夫か?」
やつぱり、最後の一撃がやばかったか?

紅毛翼にあつてーー！

「剣仁サイドー

「おーい、生きてるか？」
とナギとラカンを木の枝でつついた。 やつぱ、最後のがやばかつたか？。

てか、まだ起きねーべつじよつ。

あつ、向こうにアル達居んじやん、あつちで飯でもじこ馳走するか。

「アル・ゼクトサイドー

「彼のは、なんて、能力でじょつ？、ゼクトあなたは、ビーフ見ます
？。」

と隣の人へ聞いています。

「ふむ、魔力も氣も感じなかつたの？ それよりもあの炎が一体なんじや？」

と少し困ったよつて言つ。

「おや？ ビーフは彼のほうから来たよですね」

「ナギ・ラカンサイドー

「うつ、イッテー」 なんだつたんだ、あれ？
てか、筋肉ダルマも起きやがつたし。 それよりも向こうの方
から声と良い匂いがするな？。

「くつー、ありやなんだなんだ?」

周りを見回すと、赤髪のガキも今起きたようだな。なんだ?」の良い匂いは?。

「剣仁サイド~

アル達に自慢の料理を振る舞つてると、ナギとラカンがやつと起きたようだ。

「お~い、お前ら大丈夫か? とりあえず飯でも食え」と皿にチャーハンを盛り、2人に渡した。

「うまいですよ」

「うつ うまい」

「ふむ、うまいの~」

上から、アル 詠春 ゼクトと感想がきた。

「そりか? んじゃ食べてみるか?」

ナギとラカンが食べた。すると

「うつ うつ うめえ~...~.」「

「おい、これどうやって作つてるんだ?」

ナギが俺に質問してきやがつた。

「あつ、んなの普通だろ?」「..

「そうか~」

ナギなんだその言ひ方。

「おこ、それよりもお前は、誰だ？」

「あ～ そういえば、名のつてなかつたな俺の名は、斎藤 剣仁だ、剣仁で良いぜ。紅き翼の皆さん」

「そりだな、二つとも名の「いや、言わなくて良いぜ、全員知ってるから」 そりか」

「てか、そこにいる筋肉ダーマも仲間か？」「

「お前ら、紅き翼に入れ

「何つてこむ！？、ナギ！？」

おつ、詠春が反論してゐる

「つえ～から、良いじゅねかよ、だろアル、師匠？」

「私は、構いませんが」

「ふむ、わしも良いぞ」

「すげ～俺のこと調べないのか？。
まつ、いつか。

「んじゃ、入るつて」と、剣仁つて呼んでこれ。

いやつたぜ！…、「これで原作に突入だぜ！…。

紅き翼とのしばしの別れ！？

「剣仁！」さあ～て、ただいまグレート＝ブリッジ奪還作戦の最中です！！。

「おい！！ ナギあの鬼神兵を潰すぞーー！」

「はつーー 言われなくとも判つてゐぜーー！」

剣仁は、鬼神兵にデザートイーグル（サンザス機能）を2丁を向け、「いけーー 怒りの爆発ーー！」

ナギも鬼神兵に「いくぜーー 千の雷ーー！」

ガガガ ドゥッガ

ナギとのコンビ技で鬼神兵を潰したのだ。

アルと詠春は、ザコ兵を潰し。

ラカンとゼクトは、戦艦を潰してたのだ。

いつの間に他のメンバーが敵を潰してたんだ？。

戦闘後

「剣仁サイド」

今は、一人堤防のところで休んでいた。

「はー、疲れたー や

り過ぎたな～、何しろナギは「千の呪文の男」と呼ばれてたしな、俺なんて「炎神」やら「孤立のガンナー」・「破壊神」で、感じに呼ばれるし。

多分、炎神は、憤怒の炎とイノケンティウスを使つたからだらう、孤立のガンナーは、単独で兵士を潰してたからだと… 破壊神は、戦艦をドロゴンブレスや決別の一撃だな。と考えると

背後から足音が聞こえる。

「お～い、剣仁何やってんだ？」

ナギが俺に聞いてきやがつた。

「な～、ナギよ？ ちよいと、俺だけ単独行動して良いか？」

ナギが不思議な顔をしている。

「何でだ？ 剣仁におする気だ？」

俺は、少し困った顔でこう言った。

「あのな～、ナギよ～ 今までの戦いでどれ程の戦争孤児が生まれたか解るか？ 俺は、そいつらができるだけ助けたいんだ。解るだろ？ ナギ」

「ま～良いんじゃねいか、なんかあつたら？ 連絡するわ」

俺は、いつも感じでこう言った。

「ありがとうよ、ナギんじや今から行きますか

「剣仁、死ぬんじやねーぞ」

俺は、夕焼けを見ながら、ナギに言った。

紅毛賈を離れて…（前書き）

文才がほし〜です。

紅き翼を離れて…

「剣仁サイド」

グレー＝ト＝「ブリッジ奪還作戦後俺は、ナギ達とは、離れて単独行動をしている。

理由は、戦争孤児の救済なんかだ、まつ裏では、「完全なる世界」の各支部を潰す氣だから。

で、俺は、今立ち寄った村で虐殺の最中だ。

「おいおい、いきなり立ち寄った村で殺しの真っ只中でよ～」

ん～、あれ～？、あの武装は、確か帝国の部隊だな。だとすると、敗走兵か？ 「嫌～！！！」 崖の下から悲鳴が聞こえるな？

「止めて～！！」

幼い女の子のか？まあ 考えるのは、後だ。

愛銃を持って、崖を飛び降りた。

「????サイド」

「何で？ いつも道理の朝だたのに帝国の兵が来るの？」

母さんや他の人は、奴らに捕まつてゐるし
崖のところまで来れたが、奴らがまだ追つてくる、腕を掴まや必死
に抵抗した。

「嫌～！！！」

服を脱がされそうになり

大声で

「止めて……」と叫んだ時上から

「よう、てめえら覚悟は出来てるよな……」

青年が落ちてきた！？。

（剣仁サイド）

襲われそうな少女を助けるためだが……。

「よつ、てめえら覚悟は、出来るよな……！」

て格好つけちまつたぜ。

まあ～その後は、デザートイーグルと「96A1（狙撃銃）での虐さでは、なくいちを氣絶で済ませておいた。殺られた敵は、村の中心部に集めておいた。

「ヒテ～なこれ」と村を見渡していた。なにしろ、そじらじゅう死体や焼かれた家ばかりだ。

で俺の足下には、手足を撃ち抜かれた盗賊がいる。何で盗賊だつて解ったかだと？

崖下にいたエセ帝国兵をとつちめたら、自分達は、盗賊だとか、戦場から死んだ帝国兵の鎧を取つて、その鎧を着て村を襲つていたと自白した。

助けた少女の家族は、盗賊達に殺されていた……。

俺は、泣いていた少女にこう言った。

「なあ、お前が良いのなら、俺に付いてこないか？」

少女は、俺を見上げて尋ねた。

「本当に良いのですか？」

「なあ～に、一人増えたところ変わらないからな」

「ありがとうございます」

「そういえば、自己紹介がまだだな、俺の名は、齊藤 剣仁だ一応
紅き翼の一員だ」

「えっ！…あの紅き翼ですか！？」
驚いた顔をしている。

「そりだが、それがどうした？」

「じゃあ あなたが、炎神ですか？」

「そりいえば、そう呼ばれてるな」

少女がまた驚いた顔をした。

「お～い、大丈夫か？ そろそろそっちの名を教えてくれ

「はつ はい！」

私の名は、アリシア ホーバー・アリシアです。よろしくお願い
します！…」

元気が良い子だな。

「アリシアか良い名だ」

と少し笑いながら言った。

「アリシアサイド」

村に戻ると、両親がしに家が焼かれていた。

私は、泣いていた時助けてくれた人がこう言った。

「なあ、お前が良いのなら、俺に付いてこないか？」

私は、驚いて上を向いた。

恐る恐る聞き返した「本当に良いのですか？」

「なあ～に、一人増えたところで変わらないからな」

私は、心から驚いてこう言った。

がとうござります」

「そういえば、自己紹介がまだだな、俺の名は、斎藤 剣仁だ一応
紅き翼の一員だ」

「えつ……あの紅き翼ですかー？」

嘘！？　この人が！？

「そりだが、それがどうした？」

ま まさか？

「じゃあ あなたが、炎神ですか？」

剣仁さんは、右手で頬を擦りながら

「そういえば、そう呼ばれてるな」

えつ！？ この人が！？

「お～い、大丈夫か？ そろそろそつちの名を教えてくれ

「はつ はい！！」

私の名は、アリシア ホーバー・アリシアです。よろしくお願ひ
します！..」

「アリシアが良いんだ」剣仁さんが、少し笑いながら言つてくれま
した。

私は、頬を赤くなつてしましました。

紅毛賀を離れて！－2（前書き）

文才が！！

次号は、かなり飛ぶと思いますがよろしくお願いします。

紅き翼を離れて！！2

「剣仁サイド」

アリシアと会つてから2週間がたち、ナギ達は、アリカ姫を助けたようだ。で俺は、「完全なる世界」の支部を潰しての最中だ。

「完全なる世界」の施設に侵入するとそこには、人の腕や足などが、液体につけられているカプセルが無数にあった。

「アリシアを連れて来ないで良かった」てか奴らは、何をここでやつていたのだ？

なんだ？この声？

「助けて 助けて」

「ここから出して」

通路の奥から聞こえてくる。

かなり広い鉄格子の部屋に20人ぐらいの幼い子供達がいる。

一人一人が色々な傷をおつっている。

腕がないやつ、生きる気力がないやつもいる。

俺は、手のひらから憤怒の炎を出して、鉄格子を壊し、俺は、そのままさらに奥に進んでいくと。

二人組の研究者が台の回りで話してた。

「また失敗か？」金髪の白衣を着た男が言った。

「え、一体どこが間違っているかが解りませんわ」

銀髪の白衣を着た女が言った。

「これでは、材料が尽きてしまつ」

「平気ですか 誰が戦争孤児何かを助けるのですか？」

あいつら、戦時中だからこそ、非合法な実験をしていたのか。だがいくつか疑問が残るな？まああいつらを捕まえれば解ることだ。

おっ、考てる内に金髪の野郎が奥の部屋から泣く幼い子供を連れ出した。

「早く！」……「ひるせい野郎だな。

そろそろ俺も登場するかな。

「貴様ら…… その悪事を成敗してやる」と言いながら、出てきた。俺

「なつ！？ 何者だ、警備兵は、何をしているのだ……」
金髪が叫んだ。

「ひるせい……

「めえらは、ここで死ぬんだよ」

「なつ！？」 研究者達の顔が恐怖でひきつった。

「だが、例外がある俺にこここの研究内容を話せば見逃してやる」

銀髪がひきつったまま言った。

「こここの研究内容は、人体強化と人体の一部を悪魔化させる実験よ

(何、人体強化だ あれは、戦いの歌があるはずだ?。それよりも、人体の悪魔? こいつら、頭がおかしいぞ?)

「ば馬鹿にしてるわね!?」

銀髪が言った。

俺は、「馬鹿じゃなければ、おかしくなつた?」 と言つた。
「人体強化とは、魔法や氣と違ひ幼い頃から人体に他の細胞何かを植え付けことだ、そして悪魔化は、召喚した悪魔を人体の一部にやどすことだ」と金髪が言った。

「それなら、もうひとつお前らどこの組織の所属だ?」

研究者達は、黙つてしまつた。

「お前ら、「完全なる世界」の仲間だな」

研究者達は、驚いた顔で俺を見た。

銀髪が恐る恐る聞いた 「まさか?炎神?」

俺は、殺氣を放ちながら「そうだ、紅き翼の炎神だ、欲しい情報も手に入つし 取り敢えず、お前ら死ね」

研究者達の顔が恐怖で固まつた。

「んじやな~」

右手に憤怒の炎を出し研究者達を焼いた。

「ま、待て～！」

研究所外

さて、あの研究所は、潰したが…。あの研究所に50人ぐらいの孤児が、居たため全員を外に連れ出るのが大変だったぜ。

アリシアと合流して状況を話した。

「アリシアサイド」剣仁さんが、たくさんの子供を連れてきたのに、驚きました。

「え～と、剣仁さんは、紅き翼としてこの戦争の黒幕を倒すのと戦争孤児を助けること、ですか」アリシアが俺を見ながら言った。

俺は、アリシアの視線に耐えられ無くなり
「すまん、本当は、もう少し早く言つつもりだったのだか…」

アリシアは、俺を見て少し笑いながら

「平氣です。ですが今度からは、早く言つて下さい

「そうだな、今度からは、ちゃんと説明するよ」と俺は、言った。

「それよりも、この子達をどうします?」アリシアが困った感じで言った。

「それなら、平氣だどこかに孤児院を作るから、金や設備は、俺が何とかするよだから、アリシア君が、この孤児院の院長になつ

てくれ」

少し微笑みながら、「私で、良ければ」

「アリシア、ありがとう。」

俺は、そう言って頭を下げた。

最終決戦！――（前書き）

少し長いです。

最終決戦！！！

「剣仁サイド」

いや～、久しぶりにナギ達に会つな。

6ヶ月振りか、その間何をしてたって？

「完全なる世界」の関連施設を潰したり、孤児院を増設したりして大変だつたな 孤児院の名は、「フロー・ウイング」と名だ、もちろん院長は、アリシアだ。

「は～、一体どうしたんだ、ナギ達は、？」

3日前

俺は、いつもどいつも、「完全なる世界」の関連施設を破壊してたら、いきなりナギ達から連絡がきたのだ。

「よひ、剣仁そつちの方は、どうだ？」

こつちは、お前がくれた「完全なる世界」の情報で本拠地が解りそうで、最終決戦の準備をするから早く来いよ～！」

俺は、やっとかと実感しつつ、やるべき事を思い出す。

1つ、連合の元老院を潰す（完全なる世界関係）。

2つ、親玉をナギと一緒に倒し、正体を知る。

今、考え方などを考えた。

考へてる内に、ナギ達にあつた。

「おー！ おひなー、ナギにアル、師匠、ラカン、詠春」

「おう、久しぶりだな剣仁勝負しる」ナギは、相変わらずだ。

「ええ、久しぶりですね」アルは、普通だ。

「ふむ、どうじや魔法の方は？」師匠は、本当に心優しいな。

「おい、久しぶりに力比べやらなかいか？」ラカンもナギと一緒にだ。

「剣術の方は、どうだ」詠春も師匠と同じで優しいぜ。

～その夜～

俺達は、近くの酒場で酒を飲みながら「明日は、いよいよ敵の親玉を潰すぜ！！」ナギ張り切ってるな。

こいつら、一日酔いだけは、するなよ。

俺は、酒場を後にした。

丘の上で一人、夜景を見ながら飲んでいた。

背後からゼクトの声が聞こえてきた。

「剣仁よ何しておる？」

「師匠、俺は、ナギ達に会つて良かつたと思ひます。」

「なぜ、そんなことを聞く？」

俺は、星を見ながら 「多分、最後の戦いで誰かが死ぬと思ったからです」

「そうか、だがの剣仁、人はいつか死んでしまうのじや」

「師匠、ありがとうございます」俺は、ゼクトに礼を言いつの場を去つた。

（翌日）

ラカン事、6ヶ月の激戦で映画なら三部作、単行本なら14冊を書けると言つていた。

「完全なる世界」の本拠地が世界最古の都・王都オステイア・空中王宮最奥部 墓守り人の宮殿

「不気味なぐらい静かだな……」

ナギ、お前どうした？

しゃ～ね、

「はつ、どうせ奴らは、負けた後の事でも考えてるんだろう

「はつ！… そうだな！…」

俺が、後ろを振り返ると、

「ナギ殿、剣仁殿！…」

「なんだ、敵が動いたのか？」

「いえ…、帝国・連合・アリアドネー混成部隊準備完了しました」若き頃のアリアドネー総長セラスだ。

「んじゃ、ナギ行こづか、親玉を潰して」と言いながら、立ち上がった。

あ、あのナギ殿、剣仁殿、サ、サインを下さい

「ああ 良いぜ ほらよ剣仁」

۱۰۸۷

「んじゃ、行くか！」ナギ張り切りすぎまあ、いつか。

「おい、ナギ
良いぜ！」

俺は、自分の最大の能力を使うために敵のアジトに向き、身構えた。

「いぐぜ！」

仮想現実変換発動！ 座標口ツクオン！！
メテオド・インパクト！！！」
放たれろ俺の最強技

空から突如大量の隕石が、降ってきた。

敵がぶつ飛んだり、焼かれたりして3分の2ぐらい倒したな。

「行くぞ、ナギ」と俺が後ろを振り返るとナ

ギ達が、引いていた。

本拠地内部

居やがつたぜ。

「やあ、千の呪文の男、炎神、また会ったね?、これで何度目だい?僕達もこの半年で随時と数を減らされてしまったよ

「話が、長すぎるぜ!……!」

銃に装填してあつた憤怒の炎を打ち出した。

「やれやれ、せっかちだね、まあいいか」

ナギは、銀髪に向かつていた。

俺とアルは召喚士に向かつていた。

「アル、重力魔法で相手を止めろ!……!
「解りました」

俺は、憤怒の炎を銃に最大まで溜め
「いけ!!、決別の一撃!!!!」
と敵に向けて放つた。

ナギが銀髪の首を掴んでいた。

ヤバい!!

「ナギ!!、そこから離れる!!!!」

ナギの胸を光の線が貫いた。

「む、まづい！」

「絶対防御！！」
ゼクトが放つた。

俺も後に続き

「こい、鉄壁飛躍式！！！」

数多くの攻撃にさらされながらも、耐え抜いた、盾を出した。

んなつ！？、

鉄壁飛躍式にヒビが入った！？。

「グアアアアア！！」　俺は飛ばされて、左腕があらぬ方向に曲がっている。

ラカンは、両腕が吹き飛ばされてる。

他也大なり小なりの傷を負っている。

ナギが立ち上がり

「アル！！　俺の傷を治せ！？！」

「ですが！？、それで「30分持てばいい」……解りました」

「俺も行くぞ！？」　ナギ達が俺に振り替えて。

「だめだ、そのくふざけるな、俺は諦めないぜ」「そうだな」とナギと俺は立ち上がった。

「ま、待て！ ナギ、剣仁 あいつは、ヤベー！！！」
ラカンが言つてきた。

「ラカン、そこで俺とナギの戦いを見とけ！！」

俺は、ラカンに背を向けながら言つた。

「行くぞ、ナギ あいつを倒して笑つて帰るぜーー！」

ナギは、笑いながら 「そうだな、あいつを倒して笑つて帰るか

創造主の前
「剣仁！！ ありがとうよ付き合ひてくれて」 ナギは、少し笑つて言つた。

「当然よーー、仲間だからなーー」 俺は、言つてやつた。

「行くぞ、創造主！！」　俺が言った。

ナギと突撃していった。

ナギと俺は、千の雷とドライブゴンプレスを放った。

「いつけ！…！」

ナギ

「吹き飛べ！…！」　俺

だが、それだけやつても、創造主は、倒れない。

「」は　は　は　「」
俺達二人は、魔力がつきかけている。

「ナギ、千の雷を後何発打てるか？」

俺は、疲れきった顔で聞いた。

「後、一発が限界だな」　ナギが言った。

俺は、覚悟してナギに言った。

「ナギ、俺は、今から魔力やら氣やらを全部使ってあいつを殴る…!
だから、ナギお前も一緒にあいつを殴るぞ！…！」

ナギは、驚いた顔で言った。

「剣仁、お前は、それで平氣なのか！？」

俺は、眞面目な顔で「多分、それがラストチャンスだ！！」
ナギも、覚悟したようだ。

「解ったぜ！！！ 行くぞ剣仁！！！」

俺は、右手に魔力と氣、憤怒の炎を溜めた。

「いくぜ！！ ボルカニック・バースト・アロー改！！」

俺は、創造主を上に殴り飛ばした。そしてナギが千の雷を纏つて創
造主を殴り、創造主は、消えていった。

そして、俺は、死んだ。

（ 続く）

最終決戦！――（後書き）

まだまだ、続きます。

再び神に会つてー? (前書き)

少し短いです。

再び神に会つて！？

（劍仁サイド）

「うつ　うじは、どこだ？」田を覚ました俺は、驚いた。

目の前に俺を殺した神がいた。

「ヤツホー、久しいの～劍仁よ」

気軽に話してきた。

「おい、くそ神何でまた、俺がここにいる！？」俺は、急いで聞いた。

右手で、顎ヒゲを触りながら

「何言つとむ？、お前さんが死んだのだろ」

「は　マジで」

俺は、呆けた顔で言った。

待て！俺いつたい何があつたけ！？

（回想中）

俺とナギは、創造主を倒した。だが、奴は、最後に俺に向けて魔法を放つたんだ、何時もの俺ならかわせたが全ての力を使つた後だから動けなかつた。

その後、急いで治療を受けたが、紅き翼とアリシアに見られながら死んだ。

（回想終了）

「やつぱ、死んだのか俺……」
鬱になつた。

「お~い、こつちに戻つてこんか
つた。

神がめざへんやがつじ

「しうがない、
お主には、世話をかけたしな。
特例を認めるか?
どうじや、又生き返りたくないか?」
神が訊ねてきた。

俺は、目を見開いて聞いた
「嘘だろ?、待てよ そんなことを出来るのか? それなら今す
ぐ生き返せ!—!」

「その為には、お主の仮想現実変換能力を返してくれるか?」神が
訊ねてきた。

「良いぜ、でもよ憤怒の炎を使えるよ!こじしてくれ 頼む
俺は、神に土下座した。

「憤怒の炎か? まああれならいいか
神が投げやりに言った。

「ありがとうよ、

神様！――」

俺は、少し泣きながら言った。

「んじゃー、行つてこーい、もつ戻つて来るなよ」

神が言いながら、俺の足の下に穴を開けた。

「えつー、このパターンでまさか！？」俺は、焦つて言った。

舞い戻つた、俺！！

「アリシアサイド」

私の目の前に棺桶の中で永遠の眠りについている、剣仁がいます。

紅き翼の人達からは、勇敢に戦つたと聞いていました。

ですが、私は、剣仁が帰つて来ると信じて待つつもりです。

紅き翼の人達の手によつて棺桶に蓋を被せられた。

その時、

いきなり棺桶が光輝いて、爆発したのです！？。

「ゴッホ ゴッホ何だこの煙は！？」 この懐かしい声は！

「ナギサイド」

俺は、剣仁を見ながら、「すまん、助けられなくて」と言った。

そして、ラカンと詠春の手によつて棺桶に蓋を被せられた。 その時、いきなり棺桶が光輝いてから爆発した！？。

「ゴッホ ゴッホ 何だこの煙は！？」

ままさか、この声は！？

「剣仁サイド」

「ゴッホ ゴッホ何だこの煙は！？」 あのくそ神め、またひどい場所に出してくれたな、内心思つていた。

煙が晴れるとそこには、アリシアに紅き翼の面々が驚いた顔で立っていた。

「俺は、少し笑つて

「ただいま、アリシアそして久しぶりだなナギ」

「「剣仁」！」

ナギとアリシアが同時に言つた。

ラカンは、笑つてるし。

詠春は、驚いたまま硬直していた。

アルは、「バグキャラですね」と言つた。

師匠は、いない、やはり…。

「アリシアサイド」

私は、泣きながら剣仁に駆け寄り抱き付いて「どこに、居たのですか？」心配しました「私は、泣きながら言つた。

剣仁も私を抱きしめ「すまん、心配をかけて」と言つてくれました。

「剣仁サイド」

アリシアが俺に抱き付いて「どこに、居たのですか？」心配しました」と言いながら、泣いた時は、どうしようと考えてアリシア

を抱きしめて「すまん 心配をかけて」何か俺じゃない感じがした
！！。

俺は、ナギ達に振り返り「みんな、心配かけてすまんかった」

ラカンは、いまだに笑つていやがる。

俺は、アルに近付き「アル 師匠は？」と尋ねた。
「ゼクトは……、死にました。」と答えてくれた。
やはりか？ 俺は、無力だと感じていた。

詠春は、硬直したまんまで、そのままにしておいた。

ナギは、なぜか暗いまんまだ、
アルに訳を聞くと、「アリカ姫が連合に捕まっているのです」

俺は、そういう事かと納得しナギを殴った。

ナギが驚いた顔で俺を見て 「おい！…、ナギいつま
でも暗いまんまでいるんじゃない！！ お前は、お前の正義を貫け
ばいいだろ！！」

ナギは、少し明るくなり 「そうだな、ありがとよ、剣仁」

（ナギサイド）

俺は、あることを考えてた時、いきなり剣仁が殴ってきた。「お
い！！、ナギいつまでも暗いまんまでいるんじゃない！！ お前
は、お前の正義を貫けばいいだ！！」

俺は、その言葉を聞き少し元気だ出てきた。

「そうだな、ありがとう、剣仁」

あいつは、「当然の事をしたまでだ」
カツコつけて言った。

（剣仁サイド）

さて、アリカ姫の方は、2年間は、平氣と思う。
その間に、「完全なる世界」の残党狩りに旧世界の紛争を止める事。
それにもなつて、軍事会社を作る。

四半世紀記念（前書き）

多分あと2～3話は、戦闘が少ないと感じます。

旧世界にて

（剣仁サイド）

ただいま、旧世界の砂漠地帯での銃撃戦最中です。 何でこうなったか？ 聞きたいっていいぜ、俺が復活？ した後 ナギ達とまた、単独行動を取つて旧世界のイタリアに行き、俺のマフィアを作ろうと考え、仲間集めをするために、世界中の紛争地域に飛び回つているからだ。

そして、今の状況になる。

俺は高台から戦闘の様子を見ながら、欲しい人材を探してゐる、「はー、つまんねー、期待外れかな」 双眼鏡片手にため息をついている俺。

（30分後）

銃撃戦もピークにたつしたのか銃声が激しくなつてきた。

俺の近くに流れ弾かと思ったが、それから五発ぐらいが俺の近く着弾するから、着弾した弾から弾道を即解析し弾が放たれた方へ双眼鏡を向けた。

そこには、二階建ての家屋の屋上からライフルを俺に向けて構えてるガキ？ がいた？？。

（？？？サイド）

くそ、政府軍と交戦中なのに、何だ？高台からこいつを監視している奴は、新手の傭兵？ それとも増援（敵の）？ どっちでもいい早く消えてくれ。

「バカ野郎！－、何無駄だま打つてんだよ！？、訓練道理に打て」相棒が俺を怒鳴った。

俺は、落ち着き

「ああ、先に政府軍を倒すのが先決だな（お前をこの後撃ち抜いてやる）」

俺は、落ち着いてスコープ越しに敵を見て射つていった。

（劍仁サイド）

あの、ガキ？ 俺を狙つて射たよな？。

「優しいのか？、バカなのか？ まあ話を聞いてみるか」

俺は、戦闘が終わるのを待つていた。

（5時間後）

敵の方は、撤退していた。

俺は、反政府軍のベースキャンプに移動していたら、背後から銃を突き付け、

「動くな！！ 手を頭の後ろにーー！ 言うことを効かなければ殺す！！」 少年兵が言つてきた。

「あんたらの総司令に会いに来た、とつとと案内しろ」 かつたるそうに言つた。

（ベースキャンプ内）

俺は、友人に会う感じで総司令に「よつ、ソーリュウ元氣にしてたか？」

周りの民兵は、不思議な顔で総司令を見ていた。

総司令は、あわてていった

「貴様は、何者だ！？、なぜその名を知つている！？」

「おーい、俺を忘れちましたのか？、

たく、川に流されそうになつた時に助けてやつたのに

俺は、残念そうに言つた。

ソーリュウの方は、何か思い出した様子で俺を見た。

いきなり俺に頭を伏せて

「あの時は、ありがとうございましたー！」 と謝つた。

そして

民兵全員が驚いたまま硬直した。

～ 続く～

新たな仲間！－（前書き）

オリキヤラが登場します。

新たな仲間！！

（剣仁サイド）

俺は、何時もの口調で

「なあ～、ソーリュウ俺の仲間にならね～？」

当の本人は、驚きながら「いつ、いんですか？　でもここで政府

軍と戦わないと…」

俺は、呆れながら

「お前は、短期戦は、強いが

長期戦には、弱いだろ。

それにここの総司令は、他の奴だろ」

ソーリュウは、目を見開いて

「な　なぜそれを、知つてているのです？」

俺は、即答した

「だつて、お前に大隊の指揮は、出来無いから」

ソーリュウは、

「う　う　確かに俺には、大隊の指揮何かは、下手ですけど」

泣くソーリュウ。

キレそうになる俺は、

「何！～ウジウジしてるんだ～！　終わった事を何時までも、引き
ずるな～！」

ソーリュウは、眞面目な顔で「ありがとうございました～！」
何か、剣仁殿と話したら吹っ切れました～！」

俺は、内心、ソーリュウが仲間になつた事を喜んでいた。

「んじゃ、早速ソーリュウは、イタリアの俺の別荘に行つてくれ、「待つて下さい!!」それに自分も入れてください!!」君は、誰?」

いきなり、声をかけた少年兵は、「自分の名は、ジーク。この隊では、狙撃手をやつしています」

見るからに、10才ぐらいの少年だよな。

「少ね「ジークです!!」ジークなぜ君は、俺らに着いていく

ジークの顔が暗くなりながら「大切な人を助けるために力が欲しいからです。」

俺は、その顔を見てジークの過去をさとつた。

「そうか、良いだろ、付いてこい。

ソーリュウもそれで良いな!」

「剣仁殿が、良いのならば」

ソーリュウは、笑しながら言つ。

「ジ、ジークが行くのなら私も行きます!!」又謎の少年が声を上げた。

「え~と?、君の名は?」俺は、聞いてみた。

「はつ はい、私の名は、フィリンと申します。この隊では、観測手です。これから、よろしくお願ひいたします」頭を下げて言つた。

「ジークとフイリンは、狙撃のバー・ディーです、それとフイリンは、女の子ですので」ソーリュウが耳打ちしてきた。

「んじゃ、後の2人も、ソーリュウと一緒にイタリアに行つてて」俺は、言った。

ソーリュウは、不思議そうに「剣仁殿は、どうするのですか？」

俺は、気楽に「仲間集めをまだ続けるんだが」

「そうですか、まあ剣仁殿なら平氣ですね、ああそれと、その組織の名は、何ですか？」「ソーリュウは、少し笑いながら言つ。

「組織の名は、ダーク・ウルフハンズそれが名だ」俺は、そう言つてその場を去つた。

キャラ設定（前書き）

新キャラの説明をします。

キャラ設定

名前：ソーリュウ

36才

性格：任務中は、常に冷静沈着。だが、任務外は、優しい。

容姿：カーリーニング（フルメタル・パニック）の日焼けバージョン

愛銃：コルト・ガバメント M1191A1

「戦場の支配者」と、呼ばれてる

名前：ジーク

10才

性格：常に冷静沈着なため周りとは、関わらない。

容姿：サガラの銀髪バージョン

愛銃：ドラグノフ（狙撃銃）

ウージー

「冷鉄なる弾丸」と後に呼ばれる。

名前：フィリン

7才

性格：基本的に優しい。ジークと居ると甘える。

容姿：マオの銀髪バージョン

愛銃：M4A1

シグP220

「鷹の目」と後に呼ばれる

謎の剣豪 上 !? (前書き)

上下に別れます

謎の剣豪 上！？

「剣仁サイド~

「ヤツホー、あ～空気が美味しい」

えつ、俺が今どこにいるかだつて？。

フツフツフツ、この場所は、旧世界のとある山奥に位置するといふだ。

何で、ここに居るかだつて？ ある噂で最強の剣豪が居ると聞いたから、来てみたんだ。

「あ～アチい～、何時間歩いてる俺？」

ヤル気な下げに言つた。

「？？？サイド~

私は、いつも道理山道を走つていると

「あ～アチい～、何時間動いてる俺？」 いきなり声が聞こえて 戸惑いました。何しろ、師匠以外の人には会つたのが久しぶりだから です。

遠くから見張ることになりました。

「剣仁サイド~

俺は、暑い、暑い言いながら歩いてた。

「どのぐらいで、つくんだ。（たく、なんだか、この下手な見張り

かたは（）

言いながら、内心違うことを考える俺。
少し驚かせるか。

（？？？サイド）

あの人気が、いきなり手から炎が吹き出でるのです！？
「えつ、何であの人も炎を出せるの！？」

謎の人が炎を手から吹き出でるのです。

「ウソ…、師匠と私以外に炎を灯せる人が居るなんて」
私は、戸惑つて謎の人を見失いました。
辺りを見回しましたが誰もいません。

背後からいきなり

「や～あ～、こんにちは

（劍仁サイド）

俺は、謎の子に背後から迫つて一声かけた「や～あ～、こんにちは

たく何で、こんな幼い子が俺を見張つてたんだ？。

謎の子は、ゆっくり後ろに体を回した。「あなたは、何者です。
どうやって私の背後に

俺は、「死ぬ気の炎での高速移動だが、君にも出来るだろ」これ

は、直感で感じたことだ。

} 続く

謎の剣豪！？ 2

（劍仁義サイド）

「謎の子が驚きつつ、「あなたは、なぜそれを知っているのですか？」と問い合わせてきた。

「逆に聞くが、君以外にも炎を灯せるとは、考えなかつたのか」俺は、めんどくわかつに言つた。

謎の子は、慌てながら「そつ そんなこと有るわけがありません！」 父上は、私たち以外は、使えないと言つっていました……」

俺は、不信に思い「父上で誰だ？」と謎の子に聞いてみた。

「父上は、父上です……」とさういつと言つた。

俺は、面倒だと思いながら「それじゃ、君の名を教えてくれないか？ それと、この辺に最強の剣豪が居るって聞いたんだが？」

謎の子は、

「あつ はー 時雨蒼燕流 9代田当主

滝浪 神無「たきなわ かんな」でいります

丁寧に言つた。

俺は、目を見開いて、「そ、それじゃ、君が現最強の剣豪なのか?」

滝浪は、「はい、多分最強の剣豪は、私です」

俺は、内心かなり驚いてる。何しろ、パツと見ファーリンと同一年に見えるからだ。俺は、あまりの事にフリーズしてしまった。

神無は、俺がフリーズしたのを困ったように見て、俺の顔の前で「大丈夫ですか」と聞いたり、手を振つたりしていると俺は、気がついた。

焦つて聞いた「君」「神無です!」「神無の父親は、今ビートする?」

神無は、地を見ながら「父上は、半年他界しました」

俺は、しまった。と感じた。

「あつ 平氣ですよーー。」神無は、笑いながら言つた。

「すまん 辛い過去を思つ出させてしまつて。なあ 俺に付いてこないか?」

俺は、謝りつつ神無を組織に誘つてみた。

神無は、難しい顔をして「良いのですか？」
「私なんかで…」
言いながら俺を見た。

俺は、胸を叩きながら「任せとけ、子供の一人増えたって関係無い
から」

神無は、「あつ ありがとうございます」と礼儀正しく言った。

「んじ ゼ 僕の組織に行くか」

「あの～ その組織は、どうあるのですか？」

「あ～ 組織の場所ね イタリアにあるよ「僕は、さういふことを言つた。

「へつ イタリアですか？ 遠い所を作りましたね でも何の理由があつてイタリアなのですか？」

「イタリアと言えば、マフィアでしょう。

俺の理想だからだ！」

俺は、神無を横に抱き「んじゃすか」と言って。

飛んでいった。

組織のメンバーに会いに行きました

謎の剣豪！？ 2（後書き）

次は、組織のメンバーと顔合わせをします。

ダーク・ウルフハンズとの顔合わせー？

「剣仁サイド」

ふう、疲れた。
何で疲れたかって、そりや神無を横に抱いたまま、山越をしたからだ。

意外に山越が大変でな、頂上辺りで高山病になりかけたり、その間に追い掛けられたり…、さんざんな一日かと思ったが、神無という剣豪が仲間に入つて疲れが吹き飛んだぜ。

んで、今は、イタリアのベネチアの近くだぜい！！

えつ、どうやってイタリアに来たつて？ それは、聞かないで…。

気を取り直して、俺は、神無に「ダーク・ウルフハンズ」の概要を説明しながら基地に向かっている。

「だからなあ、俺らは、護衛、警備、調査、戦争請け負い、運び屋、なんかをするんだよー！」

「そのぐらい、解ります。ですが戦争請け負いは、反対です！」

俺は、頭痛がしてきた。

「んじや～よ、中立的立場や第3戦力なら良いか?」

「どうちも同じですねーーー。」

「解った！！！ 君は、戦争の介入じやなく護衛関係の部門に入れるよ！！！」

「それなり、良いであります」

「さあ 着いた、ここが「ダーク・ウルフハンズ」の本拠地だ！」

L

「……で、大きいですね、なんか建物が古いですね」

「そりやー、元マフィアのパーティー会場だからな
たんだろ」

えつ もうつた理由教え無いよ。

「まつ、外見は古いが内部は最新設備で埋め尽くされてるぞ」

俺は、門を通り抜けて扉を開けた。

「全員、隊長に敬礼」

ソーリュウを先頭に後の方に100人位が俺に敬礼をしていた。

「ソーリュウ、これは、一体なんだ？」

「はっ！ 隊長が来るの察知したため、敬礼で出迎えたまでです」

面倒だな

「『』苦労、私が君らの隊長であり、ダーク・ウルフハンズのボスだ
……」

ほとんどの兵士は、戸惑っている。

「黙れ」俺は、殺氣を放ちながら言った。

「諸君らは、いくつもの戦場を渡り歩いた戦士だ！！ だが我々の仕事は、戦争の介入、鎮圧等だ 犠牲を最小限に成果を最大限に出来るのが俺たちだ！！
俺に続くか？」

戦士達は、

「『』『』『』隊長に続くぜ（きます）！！！」

「行くぞ、ダーク・ウルフハンズの戦場に！！！」

「『』『』『』サー イエツサー！！！」

} 続く

ダーク・ウルフハンズとの顔合わせー? (後書き)

次号は、アリカ姫編まで飛びます。

ダーク・ウルフハンズとの顔合わせ
アリカ姫の処刑宣告から2年後…。

（剣仁サイド）

俺は、ナギ達が居る魔法世界の隠れ家に向かっていた。

「ナギは、まだ決心がつかないのですか？」

「ナギにとつては、大変な決断だからな」

「ぶつ叩いて、田を覚まさせるか」

アル、詠春、ラカンらが話してると

「じゃまするぜー」

陽気な声で言いながら扉が吹き飛んだ。

「　　誰（なんだ）（だ）　　」

「よつ　久しぶりだなお前ら」　笑いながら言った。

「 「 「 剣仁ーー?」 「

「今まで、どうだった?」

詠春が抱き着きやつになり殴つて氣絶させた。

「アル、ナギは、今どこにいる?」

「ナギなら隣の部屋に居ますが」

俺は、隣の部屋の扉を蹴り飛ばした。

「おい ナギ アリカ姫助けに行かないのか

「…………」

「ナギ 黙つてたって意味がない、お前は、アリカ姫の事が好きじ
やないのか。

一度惚れた、女を見捨てるのか」

「剣仁、聞いて良いか?」

「何をだ？」

「お前の言う正義ってなんだ？」

「正義って、お前曖昧な言葉を使つた。
まあ、正義って言葉には、人それぞれの正義があるな、例えば悪が
正義って言う奴も要るしな。」

ナギ、自分の信じる正義を貫けよ」

「……」

「ナギ、姫さんを助けんだろ！――

お前の覚悟は、そんな程度か！――

「ありがとよ、剣仁」

ナギの瞳に闘志が灯った。

「行くぜ、お前ら――..」

「やつと決まりましたか」

「決心がついたか

「はつ――

「やつとか――」

上から、アル、詠春、ラカンの順に言った。

} 続く

今俺は、処刑所「ケルベラス渓谷」より1・5キロ地点の丘から姫さんが谷に落ちるのを俺、アル、詠春、ガトウらで待っていた。

「アル、転移魔法の方は、準備出来たか」

「ええ、何時でも行けますよ。
ですが、その格好は、何ですか？」

俺の今の格好は、旧世界の特殊部隊の格好をしている。

「これが？」

俺の場合は、訳有りでな

「アル、アリカ姫が落ちた行くぞ

このワイルドな親父はガトウと言つ名だ、本名は、知らない。

俺は、腰を上げながら

「ナギ、姫さんを助けるよ
と呟いた。

（処刑所）

「よろし」「よーし、こんなもんだろ」なつ

「撮れたか？撮つたな？」苦勞さん オーハイ オッサン これ生中
継とかねえよな？」

「無礼者！！」

「何者だ貴様 名を」

「オッサン

録画はここで終わりだ で 今からここ起りのことは『なか
つた』ことになる

「あつ 貴様は！」

鎧が吹き飛び現れたのが。

「せ 千の刃の

ジジヤ ジヤツクラカンーツ！？！」

「もう少し静かにやれラカン」

「青山 詠春！」

「アルビレオ・イマ！？」
なつ ガ ガトウー···まで

「俺を忘れちや困るな」ボスらしい奴の目の前でECCMを解いた。

「なつ 斎藤 剣仁「までーー！」

「紅き翼 馬鹿なツ では谷底の女王は」

「ぐ 捕らえよ反逆者だーー！」

谷底の一人も逃がすなーー！」

「やるってのか？ 爺そんな数で」

「フフ その程度の戦力だと？ 愚か者がこのイベントの警

備は ここに見えるだけではない

周囲数十キロ

二個艦隊と三千名の精銳部隊が包囲している いくら貴様らでも

これを

「アアア、それがどうした」

「だな その程度の戦力でいいのか」

ベキベキ ゴキンツ
ガシャツ ガチツン

ラカンは、指を鳴らし

俺は、愛銃に死ぬ氣弾を装填した。

「なつ 何！？」

「んじや、行くぜーーー！」

ドカツン！！

俺は、得意の高速移動で移動しながら銃を乱射した。

ガンガンガンガン

ドカツ！————！

俺ら、紅き翼は、手加減無しにやるもんだから、そこら辺に気絶した奴や戦艦の残骸なんかが落ちていた。

俺は、一息つきながら谷の方を見ると、夕焼けを後ろにナギとアリカ姫がキスの最中だった。

「イイネエ～、
あの一人は、やっぱり絵になるぜ
独り言を呟いた。

（戦闘後）

ガトウの交渉により今回の件は、無かったことになった。

その後俺の提案によって旧世界の日本の詠春の家についてことになってしまった。

（続く）

京都での悲劇??(前書き)

少し長い文章です。

京都での悲劇？？

「旧世界　京都」　紅き翼のメンバー全員 + アリカ姫・アスナ姫とで京都の町を歩きながら詠春の家に向かっていた。

「詠春、まだつかないのか？」

「五月蠅いで、ラカン黙つてろ」

俺は、久しぶりの日本に喜んでいたのによ。

「か、何でアスナが居るんだ？」　しかもなつかれてるし。

「ケンジ　お腹減った」

上目遣いで俺を見るな。

アリシア秘伝の技を使うか。

屈んで目線をアスナと同じにして。

「アスナちゃん　もう少し我慢できるへ。
「我慢できる」

「よし、いい子だ」

俺は、アスナの頭を撫でた。

「ツウ」／＼／＼

「子供の扱いが上手いですね、私もその技を教えて下さい」

アルがふざけたことを言い出した。

「アル、誰がお前何かに教えるか！！」

ガチッヤ ガンガン

俺は、アルに銃を向けて引き金を引いた。

「アル テメーかわすな！！」

「嫌です まだ死にたくないので」

「ガツハハハハ！！！」

ラカンがまた笑つていやがる。

「五月蠅いぞ、ラカン！！」

「いや～、オメ～ラ本当に面白いからよついな

「五月蠅いぞ、お前ら少しば、黙つていろ！――！」

まあ、確かにこれは、五月蠅すぎだな。なにしろ、格好がな、ラカンなんて上半身ジャケットを着てるだけだし
アルは、深くフードを被つてゐし
ナギとアリカ姫は、イチャツイてるしよ
まともなのが、俺に詠春 アスナだけだ、周りの目線が嫌だ。

「詠春」、あれなんとかして、周りの目線が嫌だよ～「

「平氣です。認識阻害を使つてますので、周りからは、騒がしい外国人の集団と思われてるだけですから」
アルが言つた。

「詠春　早くお前んちに行こいつ、頭が痛くなつてきた」

「そりだな、早く行こいつ」

（詠春の家）

俺らは、飯を食い終わつた位に巫さんみたいのが慌てて入つてきた。

「え　詠春様　大変です！！！」

스스　スクナの封印が解けそうです！――！」

「なつ何！――？？」

詠春が慌てて立ち上がり駆け出していく。

ドタドタドタドタ

俺は、酒を飲みながら五円蠅いなど考えていた。

ドタドタドタドタ
バシッ

走つて来て襖を勢いよく開けて、言った。

「悪い、みんな手伝ってくれ……！」

「このとうつ……！」

土下座をする詠春

「何が合つたんだ詠春」俺は、面倒事だと思いながら聞いた。

「スクナと言う鬼神の封印が解けたんだ、暴れ出す前に倒さないと……」

俺は、ナギ達任すかと考え方を練つた。

「詠春、そのスクナって強いんだろ？..」

ナギとラカンが反応した。

「ああ、強いが、それがどうした？」

ナギとラカンが立ち上がった。

「よっしゃ、行くぞ詠春・ラカン！！」

「そうだな、ナギ！！」

二人は、詠春を掴んで出ていった。

（一時間後）

ぼろぼろになりながら帰つて来た四人？

「アル、お前いつの間に行つてた？」

「え、最初から行つてました。それで、傍観していました」

「そつか、んじゃ俺は、帰るわ。
じやくなー、アスナを宜しく」

俺は、そのまま高速移動をして消えた。

（続く）

京都での悲劇？？（後書き）

次号は、ネギが担任なつて少しした頃です。

会社全体の解説

構成人数：3000人
(非戦闘員1000人)

陸上兵器

戦車：5台（M1エイブラייםズ）

装甲車：10台ストライカー

車両：10台ハンビー

海上兵器

駆逐艦：4隻（通称：オマージュ、ライトニング、コルベット、デ

ストロイヤー）

輸送船：2隻（通称：プライス、メーリング）

潜水艦：2隻（通称：シーラ、ファンタム）

航空兵器

輸送機：3機（C - 130）

輸送ヘリ：14機（CH - 47 5機、UH - 60 4機、UH - 1 4機）

攻撃ヘリ：10機（AH - 1S 5機、AH - 64D 5機）

観測ヘリ：2機（OH - 1 2機）

特殊武器

パワードスース

（アイアンマンのに似ている）

多脚砲台

（サソリがモチーフ）

F - 35（アメリカから試験的に渡された）

V - 2（アメリカから試験的に渡された）

レールガン（自社で作った物）

人工衛星（自社で作った物。主に監視、たまに破壊活動をする）

など、また変わると思つ。

会社全体の解説（後書き）

次号は、ネギが担任になつて少しあした頃です。

麻帆波外園に回かひ（福井也）

麻帆良学園に向かう

「DU 社長室」

カタカタカタ

「ハア～、そろそろ休まねえ～」

パソコンに情報を打ちながらカッタリそうに言つ、だらしない社長。

「ダメです。始末書や報告書に田をとつして下さい、全部ですよ
全部！～！」 しつこく言う美人秘書。

「他の奴に任せれば良いじゃん？」

窓の外を眺めながら言つた。

「何言つてるのですか！？　社長が田をとつすものばかりです！
！」

社長　社長言わてる人物は、紅き翼の一人・DHの創設者

斎藤　剣仁だ。

美人秘書は、ジークの相棒のフィリン　今は、訳あつて療養中（書類の整理など剣仁のバックアップが主）

「知つてますか？ 社長、会社全体の人数を？」

「どんくらい居るんだ今」

「3000人です 3000人！－！」
怒りながら言うな。

「あー、解つた 解つた休憩だ一時休憩」

「解りました。飲み物と軽食を持つてきます」

ガチャ　　スタスター

「ふつ、行つたかそろそろ計画を実行するか。弟子の頼みでもある
からな」

言いつつ、机の引き出しから一つの封筒を取り出した。

「あつ、置き手紙してこ、えーと《ちょっと遊びに行くわ、絶対に
探すなよ》これでよし」

俺は、本棚に近づき本を一冊押した。
すると本棚が左に動き部屋が現れた。

「フツフツフン、俺の相棒と」

鼻歌を歌いながら、荷作りを始めた。

「エリは、MP5、M14、FA-MAS、G3 SG-1かなあつ、後SIG P200、Mk23だなおし、行くか」

俺は、荷物を持ち地下駐車場に向かつた。

フィーリングが部屋に入りながら

「すいません、社長遅れてしまふ、居ないビビー、まさかまた脱走！」

慌てて部屋を飛び出した。

地下駐車場

「ふう、疲れた。あつ居た居た、オヤッサン、俺の車のキーを返してくれ

通称オヤッサンの車の監視役であり良き酒友達だ。

「おう、社長じゃねーか、また脱走か？」

笑いながら話かける。

「まつ、そんな感じ、それよりも、早く俺の車キーを返してくれ

「えーと、合った 合った。これだろ」

「おひ、サンキュー恩に着るぜ」

俺は、急いで、車に近寄りカバーを取った。

そこに在るのは

「こつ觀ても良いぜ」

俺専用の黒塗りのハンビィーだった。

部隊で使つてたのよ、俺が回収し黒く塗つた。（元が軍用だから頑丈、改造して燃費・運転性能を高めた）

「さて、さつあと逃げますか」

ガチャ

ブロロロロロロ

「いました、繰り返す。社長がいました

「げつ、もう見つかった。まあいつか」と言しながら、車を猛ス

ペードで発進させた。

「ゲートを閉めろ、何コードが違つだと……」

警備員が叫んだ。

「コード入力は、もつと難しくして様にフイリンに言つとけ
メガホンを使いながら言った。

「又逃げられた……」疲れはてた顔で逃げた方を眺めた。

（車内）

「ようし、脱出成功！！

後は、麻帆良学園へ向かうだけだ

「……」

車内で、騒ぐ俺だった。

} 続 < }

麻帆良学園に向かひ（後書き）

ネギに念つまでの十年間は、ストーリーに組み込みます

麻帆良にて

（麻帆良学園付近）

「来たには、いいけどどうやつて入るの？」

車内で一人考える俺

「ん~、弟子に連絡するか」

俺は助席に置いてあるカバンから、携帯を取り出した。

ピッピッ

「久しぶりだな、タカミチ元気だつたか？。
お前からの依頼書
を観させてもらつた。

俺直々にやるから、先方に言つといて、んじゃまた後で」

俺は、携帯を切つても助席に放り投げた。

「さて、JICOの警備体制は、どのぐらいかな」
少し笑いながら言った。

(麻帆良学園の一角)

「タカミチ君、それは、本当かね？
あの炎神と言われた彼が来るのは」

一人の人物が言った。

「ええ、多分あの人は、本氣ですよ」

どこかガトウに似た感じを放つ人が昔を思い出す様に言った。

「ふむ、ワシは、彼をネギ君のクラスに入れようと思つがどうじや

「多分、平氣だと…思います」

「ふむ、ではネギ君の副担任と言つことによからう」

二人は、暗闇の中で不穏な話をしていた。

(次の日)

俺は、昨日とつた、ホテルで一夜を過ごし朝飯を食べ、グレーのス

「フア～、久しづりこんな着たな

「ははは、いつもの」とですよ

「俺は、スーツの襟をただしながら言った。

「げつ、もうこんな時間か！… 急がねーと…」

俺は、ロペーでチョックアウトしキーをもらつた。

ガチャ　ドン
ブロロロロロロ

俺は、急いで車を発進させた。

（麻帆良学園の学院長率）

「タカミチ君、ちーと遅くないか

「失礼します。副担任の方をお連れしました」

「ふむ、すまんの～しづな先生」

「よつ、タカミチ久しぶりだな。

んで、あの妖怪もどきの爺がお前の言つてたやつか

「ははは、まあそうですけど、本当に久しぶりですね、何年ぶりですかね」

「タカミチ 旧交を喜ぶのは、ここまでだ、これからのは、仕事のだ、いいな」

「ええ では、自己紹介から今椅子に座っているのがここの中園長であり魔術会の方で理事長をやつている「近衛 ジヤウ」という感じです」

「んで、爺、ここでする他の仕事って何だ」

「ふむ、それについては、まず広域指導員、夜の警備、そしてあるクラスの副担任じゃ」

「俺は、煙草をくわえて考えて居た

「OKあと、爺 僕の部屋は、どこだ？ それとハンディー3台分

の駐車場をくれ

「ふむ、解った手配しよう。
してこれから来る先生は、千の「ナギの息子だろ」…知つてたのか」

「ああ、知つてたよ。
それと俺が紅き翼のメンバーって言うなよ」

「なぜじや」

「自分で探さないと意味ね～だろ」

「フオフオフオ　解つたぞ」

「ン」

「失礼します。

ネギ・スプリングファイードですけど」

「お～、ネギ君入りますい」

「あつ、はい

「まずは、自己紹介じゃなタカミチ君の隣にいるのが、「斎藤剣仁だ、よろしく」彼は、君のクラスの副担任となるのじや

「あつははい、解りました。そこ「剣仁で良いよ」剣仁先生これからは、お願ひします」

俺は、ネギ君と会った時ナギに似ていると思ったが、ネギ君の礼儀正しさに面食らつた。

→2-A入り口へ

「ここが、僕達が、担任をするクラスです。
先に行くので呼ん
だら入つてください」

「ああ、解つたよ
俺は、外からクラスの中を眺めて一言言つた。
「騒がしいクラスだな」

「皆さん、席に座つてください。
新しい先生が来たので自己紹介をしたいと思います。
入ってください」

「ぬぬ、私の情報網に引っ掛からないでどんな人物だろ?」 カメラ
を持ったまま頭を抱えていた。

「朝倉、大丈夫?」

「「楓」 新しい人つてどんな人だろ?」
双子が細目の子に
聞いた。

「ふむ、どんな人で「ざるかな」」

「強いアルかな」

小柄で元気な子が言った。

ガラガラ

教卓の前に立ち

「ここにちは、2・A組の皆さん。今日からこのクラスの副担任に
なる、斎藤 剣仁でだ。」

「以後よろしく」

「　　「　　「　　「　　「カツ　　」　　」　　」　　」

「カツ」

カツて、が何だ？

間を置き

「　　「　　「　　「カツ　　コイ～　　」　　」　　」　　」

突然の大音量に俺の鼓膜が揺さぶられた。その上行きなりの質問攻め。

「先生つて、今何歳何ですか？」

「先生の身長と体重は、「ちょっとまつっこい」は、麻帆良パパラッチの朝倉がみんなの代表で質問するわ」朝倉じややつて」

「俺もそつしてくれた方が楽だ」

「んじゃ、先生の年・身長・体重を教えて」

「年は、24歳（不老のおかげで）、身長は、180cm、体重は、最近ので80キロ位だな」

「先生の趣味・特技・現在彼女有りですか？」

「趣味は、料理や武術、読書何がだな。特技は、バイクやATVなんかで、アクロが出来るな。彼女は、…いるぞ」最後の方で声が小さくなつた。

何人かの生徒が武術と言つたら反応したよな。

「これで、質問タイムは、終わりだ。早く席に座れ」

「「「「え～～」「～～」」

「良いから、席に座れ」

その後の授業は、無事に終わつた。

（放課後）

「ハア～、何であんなに元気なんだ？」俺は、俺用のバイクを押しながら愚痴つていると、前方に男3人で囮みながらナンパするのが見えた。しかも、男が殴ろうと腕を上げた時に大河内の顔が見えた。俺は、無我夢中で殴ろうとした男を飛び蹴りのえじきにした。

「大丈夫か、大河内、和泉少し離れて待つてろ」

「「はつ　はい！！」

男は、ボクシングの構えをし後の一人をボコシタ。

「ありがとうございます。先生」
大河内が俺に礼を言つてきた。

「まあ、当然の事をしたまでだそれより、和泉、お前は、平氣か」

「あつ はい平氣です」何しろ一番の被害者だからな。

「んじや、俺は、これで」

「待つて下さい。

これを運ぶのを手伝つてください」

「ん 解つたよ、それでこれをどこに運べば良いんだ？」大河内

「あつ 教室に持つて行けば良いです」

「解つた。よつと けつこう重いなこの荷物。二人の荷物を全部
持つ俺。

「持ちま「平氣 平氣」のぐらになれるから」わ 解りました

その後、和泉と大河内からアドレスを交換した。
俺は、和泉にフラグが立つて事に浮かれていた。

（2-A 隅前）

俺は、和泉達と荷物を運ぶのを手伝つて教室まで来たが、中から怪しげな音がするのは、勘違いだよな…。

「先生 さつ入るつ 和泉が俺の背中を押して教室の中に入れた。

覚悟を決めた俺は、扉を開けると

パン パン

クラッカーの音が鳴つた。

「何だこれ？」

頭の上にクラッカーの紙なんがどつさり降りかかった。

「剣仁先生の歓迎会ですよ」

「あれ、タカミチ」つの間に居た?」

「ハハハ、酷いですね」

「あつ、剣仁先生」こっちです「ネギ君が、腕をふつて、呼んだ。

「ネギ君、まさか酒を飲んだか?」

ネギ君の顔が赤くなり、酒の匂いがする。

「ふえ、平氣ですよ」

「まつ、俺も酒でも飲むか」

懐からウオッカなどを出して飲んでいた。

（一時間後）

俺は、学園長に手配させた部屋に危うい足取りで向かっていた。

「ふう、そろそろ出でたらどうだ」

「いつ解った？」

そこに居たのは、長身の褐色肌の真名が居た。

「勘だ 勘」

「そうか、本当に不思議な人だな」

「んじゃな、俺は、眠いから」

俺は、酔いながら部屋に向かっていた。

（続く）

ヒガアと会つて！？

「とある部屋？」

うつすらと日の光がカーテンの間からさしてきたり。

「ん~、頭が~あれここは、どこだ」

俺は、掛けてあつた毛布をどかした。

するとそこに居た、人物を見て俺は、固まつた。

「ん~おはよう、先生、早い日覚めだな」

隣にいる人物が起きながら言つ。

「真名……、何で俺のYシャツを着て、俺の所で隣で寝ていた

俺は、昨日真名に会つた後の記憶が思い出せないでいた。

「あの後、タカミチ先生が来て部屋の事を話して消えたら、先生が寝てしまつて私が運んだんだろ」

「そつなのか、ありがとうな真名」

俺は、真名の頭を撫でた。

「／＼＼＼ふ普通の事をしたまでだ

顔が紅いぞ、顔が。

「でもひひとつ何で俺のYシャツを着ている」

「ああ、これがなんとなく着たまでだ。それとも、は「もう良いから！……それ以上言つな！」フッ 解つたよ」

たく何時からこんな性格になつた。

「なあ、真名この部屋は、どこにあるんだ?」「俺は、朝ごはんを作りながら聞いた。

「ここは、女子寮の管理人室だが」

「まあ、頑張ることだな、先生」「はう……、なんじやそりや———。」

その後は、朝ごはんを食べて学校に行かせた。

ノ
昼休み
屋上

「ファ～、寝み～」えつ、午前中の授業、全部バクレタヨ。

「ん、タカミチか、なんか、ようか？」

「ええ、今日の午後12時に世界樹前の広場に来てください

「メンドー、てかそれってこの学園に居る、魔法教師・生徒への紹介だろ」

「ハハハ、ばれま」エヴァを呼んでおけ「はつ

「だから、エヴァを呼んでおけ」仰向けになりながら言った。

「は はあ～」

俺は、それつきり寝た。

（夜 12時 世界樹前の広場）

俺は、本社の研究班が作った。試作電磁迷彩服を使って20分前から待っていた。

「眠い」

俺は、あぐびを噛み殺していた。

「学園長、今日来る警備員は、強いのですか？」 生半可な奴は、

要りませんから」

何だ、あの肌黒野郎殺すか？

「フオツフオツ、平氣じやよ君らでも知つていぬはすじや」

「はつ！… 私を呼んだんだから面白い奴だろうな、爺」
金髪幼女が爺に起つていてる。

俺は、金髪幼女の後ろに移動してから電磁迷彩の電源を止めて抱き上げた。

「「「なつ…！」」「」

周りの先生が俺の突然の登場に驚いてた。

「誰だ、貴様 離せ！…！」

金髪幼女が暴れだした。

「ヒッテー、久しぶりの再会なのに、だるエヴァ」

俺は、懐かしさに喜んでいた。

「まさか、お前は、ケンジか！？」

「やつと気付いたのかよ」

「フオツフオツ、いつの間に面たのじや？」

「まあ、良いじゃね～か。それよりも、ひとつ俺を紹介しつけ
うつやこ。

「まあまあ、ヤコまでじやよ。彼の名は、荒藤 剣仁じやよ
一つねは、炎神じやがな」

「あの紅き翼の一…？」

「炎の殺し屋…？」

「まあ、そんなもんだな」

俺は、いまだにエヴァを抱き上げたままだ。

「フオツフオツ では、力試しでタカミ「多分殺すぞ」 なじじやの
爺ビビつてないか。

「あの炎神殿、一つ聞いて良いですか」

「なんだ？」

俺は、肌黒野郎の方を向いた。

「あなたは、立派な魔法使い のはず、なぜ 閻の福音 を殺さ
ないのですか？」

「…テメエ、立派な魔法使いを目指してゐんだよな、ならもし
自分の家族が吸血鬼なんかになつたら、自分の手で殺せるか？」

「それは…」

「覚悟は、有るのか無いのかどつちだー！」

「…」

「結局きまんか ザコが、爺 僕は、帰るぞ
俺は、エヴァを抱き上げたまま移動した。

（エヴァ宅）

「さあ、聞かせてもらひうぞ！！ サウザンド・マスターは、生き
ているのか」

エヴァは、俺の襟を掴んで聞く。

「あの馬鹿ナギが死ぬわけないだろ」

俺は、エヴァを落ち着かせながら言った。

「なら、ケンジ 貴様が私の呪いを解け
「解つた、解くから座れ」

「へつ、お前にこの呪いを解けるのか」「解けるが、それがどうした」

「今す「はい、これ飲んでね」」**シング**「俺は、一緒に持つてきと
いたケースの中から、緑色の液体が入った試験管をエヴァの口に流
し込んだ。

「ゴホゴホ ハアハア
咳き込みながら言う。
—— 一体何を飲ませた！――」

「あれね、俺が作つた解除薬だが、エヴァ体に魔力がみなぎるだろ」

「何!? フツハハハハ魔力が魔力が戻つたぞ!!」

「大丈夫ですかマスター？」

「平氣だ、それよりも酒の用意をしろ、茶々丸」

「判りました、剣仁せん」「剣仁で良いから」剣仁さんのもですか

「もちろん要るだろケンジ」

「解ったよ、俺も飲むよ」

その夜は、多分一生の思い出になつただろう。

} 続く

トガアと会つてー? (後書き)

次号は京都へんです

「アリ、寝まい」

昨日夜中まで俺は、荷物や装備の準備のせいで寝不足状態でいた。

「なに、眠そうにしてるんだよ

五七二

あのな
爺から
一匹僕が作棘が在るんが

どういう仕事だ

俺は、内心エヴァなら教えても良いかと思つた

「関西からのイヤガラを出来るだけ防ぐ事」

「面倒な事だな」

「」「」「」

僕は、悲鳴が聞こえた方を向いた。

「『カエル（だな）』」
俺とエヴァは、少し固まっていた。

「エヴァ、じゃあなー」

俺は、その場を急いで離れた。

「フウー、これは、本当に面倒だな」
俺は、少し離れたところに居た。

「先生、なぜここに

「よつ、桜咲」

「待つてください」ネギの声が聞こえた。

「次は、なんだ…、ツバメ？」
しかも、親書持ってるし。

「本当に俺を起こらせたいのか
バメを驚掴みした。

「桜咲、これをネギに」

俺は、親書を桜咲に投げた。

「はっはい！！」

俺は、その場を離れた。

「清水寺」
「高いアルナ」

「誰か落ちないかな

「拙者がいつてくるでいざれる」

「お前ら、待てーーー！」

何このハイテンション！？

まじ疲れる。

「フツ、おいケンジ」エヴァが呼ぶ。

「なんだ？」

「あれを見ている」

「はつ？」

俺は、エヴァが指した方を見た。すると、何人かが落とし穴に落ちていた。

「俺は、もう手を出さないぞ」

俺は、エヴァとその場を離れた。

（旅館）

どうやら、あの後酒入りの水を飲んで、クラスの半分ぐらいが寝てしまつたようだ。

「フウー、疲れた」俺は、一人屋上で酒を飲んでいた。

「ストレス溜まってヤダナー」

愚痴つ正在中と、お姫様抱っこされた、このかを見つけた。俺は、その後を付いていった。

「チイ、どこに行きやがった」

俺は、憤怒の炎を両手に灯し、ながら、飛んでいた。

すると、前方の駅から聞きなれた声が聞こえた。

「見つけたぞ！――！」

俺は、憤怒の炎の出力を上げた。

（駅内）

俺が着いた時は、術師の声が聞こえた。

「……そやな、まずは、呪薬と呪符でも使ひて、口を利用んようにして、上手いことウチらの言つコト聞く操り人形にするのがえーな……」

俺は、その言葉を聞き何かが壊れる音がした。そしてただ一言。

「殺ス」

「アスナサイド」

「ここのかをどうするつもりなのよ……」

猿に捕まりながら言ひ。

「……そやな、まずは、呪薬と呪符でも使ひて、口を利用んようにして、上手ことウチらの言つコト聞く操り人形にするのがえーな……」

「いい度胸だな、オソナ」

聞いた、事のある声が聞こえてきた。

「剣仁サイド」

「いい度胸だな、オソナ」

俺は、殺氣を放ちながら上から降りてきた。

ネギ達は、俺を見て驚いていた。

「お前らは、離れていろ」

俺は、感情の無い声で呟いた。

俺は、術師のオンナに銃口を向けていた。

「んなつ！」「この嬢ちゃんに当たリマッセー……」「…
慌てる術師のオンナ。

「平氣だ、俺は、狙つたものは、外さない」
俺は、デザートイーグルを構えてると、

「石の槍」

突然、俺の右腕と左足に石の槍を貫通してきた。

「やあ、炎神」

白髪の少年が現れた。

「よつ、フロイト俺を殺しに来たのか？」

俺は、自分の身体を炎化させて石の槍を抜いた。

「いや、今日のところ、帰るよ

「誰が、帰すか」

俺は、決別の一撃を放った。

煙が晴れるが、そこには、誰も居なかつた。

「ちつ、転移魔法か」

俺は、近衛を抱き上げてネギ達のもとに向かつた。

〈ネギサイド〉

「何で、剣仁先生がここに居るの!? それに身体から炎が出てたし!？」

アスナは、騒がしく言つ。

「そうですよ～!? 何で、ここに居るんですか!？」
ネギは、アスナと同じ事を聞いてきた。

「落ち着いてくれないか? 話せないんだが

「「ははい」」

「身体から炎が出てきたのは、俺の固有能力の発展方だ」

「「発展方だ??」」

「そうだ、まあこの続きは、また今度な」

「納得、いかない」」

「ハア～、桜咲は近衛を連れてけ」

「へつ、いやで「いいから」解りました
泣々引き受けた。

「フア～、俺は、眠いから帰るな～」
俺は、ネギ達をおいて帰った。

} 続く

「ハア～」

俺は、昨日の事にため息をついていた。

「又か～、何でそんなにため息をつく」エヴァが隣で言つてくる。

「昨日の夜に襲撃があつたんだ、そん時にちょっとな～」

「誰かに、正体を知られたか？」

「ぐつ」

「図星か、もう少し注意しろ」

「…わかった

何で、エヴァに注意されるんだ口。

「てか、エヴァ お前らは、今日の予定じつするんだ?」

「簡単な事だ、剣仁貴様が案内しろ」

「…、わかつた」

＜昼飯中＞

俺とエヴァは、詠春と来たことのある、店で食事をしていた。

「なあ～、エヴァ」

「なんだ、ケンジ」

「頼むから、先生と呼べ先生と。それよりも、久々の外だからって
はしゃぎすぎだ!!」

「はつ、そんな事か。 そいつ、貴様だって人の事を言えるのか
!!」

「ぐつ、だが俺は、エヴァより謹がしく無い」

「二人とも同じだと思われますが？」
茶々丸が言った。

「ぐつ

「

重苦じ心中で俺は、「…、エヴァ」

「なんだ」

「多分、明日の夜にエヴァの力が必要だと思つから手伝ってくれ

「お前の力でなんとかならんのか」

「えじや、エヴァ俺は、お前に上位の仕事を依頼したい

「良いだろ、報酬は、「一口お前の話の事を聞く」…、それで、良いぞ」

エヴァの囁が、口づけ。

「あつ、やつぱるば、ネギが「クられるの、今つか~。マッシュカ~原作キャラとは、これ以上関わりたくないし。

<旅館>

「いい湯だな、これで酒が付けば文句無いが
俺は、一人で入浴中。

エヴァ達と旅館に帰ると、なぜかネギが疲れきった顔をしていたのが見えた。

「何で、困つてたんだ？」

「あつ、確か、朝倉に魔法かバレるのって今日か、てことは、朝倉が風呂に来るんじゃねーか！！！」
俺が考えると。 ガラ

誰か入つて来た。

「あつ、すいません。 表に札が無かつたもので
しづな先生登場！？」

「あつ！！ これは、すいません。 自分は、今出るの「待つてくだ
さい」「はい？？」

そう言えれば、朝倉が変装するのって、しづな先生だったな。

「何で、しょうか」「いは、のつてやるか。

「ネギ先生について何ですか？」

「ネギ君になんかあつたんですか？」

「ええ、私見てしまったんですよ、ネギ先生がま「魔法を使う所をですか」！！！」

かなり、焦つている朝倉。

「しづな先生いや、下手な、変装は、辞めたらどうだ朝倉」

「…、何時から氣づいたんですか、剣仁【先生】元に戻つたな。

「俺と話した時の感じかな」

「先生もネギ君と同じ「魔法使いだせ」えー……」

声でかすぎ。

「朝倉、こいつら側に入るのは、止めとけ。下手したら、お前死ぬぞ」

「…？」

かなり、びびったか。

「俺は、先に出て

言ひながら、風呂を出て行った。

その時は、朝倉の事を俺は、甘く見ていた。

「先生、そんなんじや、私を止められないよ
興奮する朝倉だった。

〈夕食後〉

俺は、自分の部屋で愛銃の整備をしていた。

「やう言えば、まだ工口ガモに会っていないな？マッイツカ～

俺は、愛銃の整備を続けた。

ある部屋で事は、進んでいた。

「『くちびる争奪！－修学旅行でネギ先生＆斎藤先生とラブラブキッス大作戦！－』」

朝倉とエロガモが手を組んでいたのだ。

「なんだ今の？」

俺は、やな感じがしていた。

俺は、内心まさか、俺には、来ないよなと思っていた。

コンコン

扉を叩く音がした。

「誰ですか？　鍵は、かかってませんよ」

「私だ、先生」

「真名か、こんな夜に何の用だ？」

「仮契約をしてもうつぞ、先生」

「はいー！？」

背後から気配を感じ、そこで気を失った。

「フウー、すまんな楓」

「平氣だいじわるが、やつ過ぎでな、ないか?」

「いや、いつしないと私達がやられてた。それよつもせつねん付けよ!」

真名が俺の上に乗りかかり、キスをしてきた。

「熱々でござるな」誰だって、このキスシーンを見れば、言こそうな事を呟いていた。

<2分後>

俺が目を覚ますと顔を赤くする真名が座っていた。

「…、真名もしかして、仮け「仮契約だろ、やつたよ
…、マジ」

／＼＼＼＼

「マジだが、かなり濃いのでな
頬を赤くさせながら言うな。」

「……、そつか。後でカードを見せろよ」

「？？？」
良いが、何で後でなんだ？」

「アーティストの世界」

「……、やつ過ぎやしないか、ローバーで正面座を朝までせとけば良

くないか？」

「そりしてやるか」俺は、朝倉達が居るで在りつ部屋に向かつた。

トマホークの前

「気配はつつ、いいで合っているな」

俺は、開けてそつと入った。

「姉ちゃん、早く逃げるヤー！ー！」

こいつがあれか。

「そうね、早く逃げたほうがいい」「逃げるだと」ひいー！

! !

逃げそうになる2人を捕まえた。

「　「ヒイーーー！」」

「ちよっとお仕置きな

「　「イヤだーーー！」」

2人の悲鳴が響いた。

（ 続く ）

「先生、起きたか。
誰かが、俺を揺さぶる。

「ん~、誰だ、俺の睡眠の邪魔する奴は?」

俺は、言いながら起きると、真名が立っていたのだ。

「起きたか、先生

「…、毎度の事だが今回ま、どうせいつ入った?」

「簡単な事さ、鍵が掛かつてなかつたからさ」

俺は、記憶の中に鍵のかけ忘れがあることを思い出していった。

「そうか、悪いな真名

俺は、何時も道理に頭を撫でた。

「――。それよりも、早く朝飯を食べに行くな

(顔を紅べこぼれ、真名は、やっぱ良こわー。) 内心おもつちやう俺。

「真名 先に行つてくんない」

「わかつた?」

「さて、行つたか」 鞄から通信機を取り出した。

「ピー ホンタイ キドウ
ナマエ カイキュウヲ」

「斎藤 剣仁

総司令だ

「ショウニンチュウ…カンリョウ」

無機質な声が響き終わると

「総司令!! 何時まで、待たせるのですか?」

「うわわわわわわ…、秘書が叫んできた。」

「今夜、出る。」

「例の部隊と物を用意しろ」

「俺は、それだけ言い切った。」

立ち上がり、真名の後を追つた。

夜旅館内

えつ、時間が跳んだって、何にも無かつたからイイジヤン。

「ヤツベ寝過ぎたー！」

俺は、旅館の廊下を武器を装着しながら走っていた。

「ハガアーー！ 行くぞーー！」

俺は、エヴァを見つけ連れ去った。

「轟ちゃんかーーー！」

「無理だ！！！ 一分一秒が惜しいだ！！！」

エヴァを脇に抱え、後ろからは、茶々丸が追っている。

「先生、一体何があるんですか？」

「ネギ達が、襲われている。それに、過去の遺物を漬すチャンスだ！」

ロビーを通過してると真名・楓・古らが居た。

「おい！…そこ付いてこい！…」

「……？」

三人は、俺の方を向き

「仕事か？」

真名が俺に言う。

「どうせ、連絡が来てるだろ」「ゆえからので」「やるなー」 そうだ、それに強い奴も居るぞ

楓と古が食い付いた。

「ああ、いる。 てな訳でわざと行くぞ！…」

そんな訳で俺らは、外に出た。

バ――――――

UH-1が着陸していた。

「お待ちしてました。ボス！――！」

中から兵士が出てきた。

「ありがとうございます、速く現場に行くぞ」

「はい！――」

そんなんで、俺と5人で戦場に向かった。
えつ日本政府からク
レームが来ないかだつて？ 平氣平氣 政治家どもは、俺に弱味
を握られてつから。

<機内>

「おい！！ お前ら大丈夫か！！」

俺は、一言も喋らない真名達に言つ。

「――――――」

無言状態が続く、そんな中

「目的地に後2分！！」

パイロットの声が響いた。

「…、作戦内容の復習だ。 真名・古が化け物とここに行く。楓は、学ランを着たガキの相手。エヴァは、メインの破壊。これで、終わりだ」

「目的地上空！？」

「イケイケ！…！俺は、真名達にパラシューートを着けて放り出した。

「楓！… お前もイケ！…！」

「解ったでゴザル」

俺は、後で三人から殺られると思った。

「ボス！…！」

「なんだ？ もうスクナが出たって言つなよ」

「スクナの方は、まだ平氣ですが。特殊狙撃隊から連絡が来ません」

「…、本當か。そつなるとミサイルの誘導は、どうするか？…マツイッカ」

「…」「…」「…」「…」

なんか、この人大丈夫って見られてる。

「俺は、もう行く。エヴァは、テカイのが見えたら、来てくれ」

最終チェックをしながら言つ。

「わかつた。死ぬなよ」

「はつ、誰に言つ。俺は、不死身だーー！」

叫びながらネギたちの元へ飛んだ。

ドゴン！！！
着地シッパイ。

「よつ、フエイト今度は、殺しに来たぜ」
痛みを堪えながら言った。

〈ネギサイド〉

この白髪の少年に苦戦中に橋の一部が吹き飛び、そこから聞こえる
声に驚いた。

「よつ、フエイト今度は、殺しに来たぜ」

「剣仁 ガハッ！」

剣仁も俺に力をとられて白髪の少年に吹き飛ばされた。

〈剣仁サイド〉

（たく、ネギも俺に力をとられるつて…。）

「行くぜ、フエイト！！！ 奥義・炎竜双火 えんりゅうそう
か！！」

俺は、自分の体のいたる所から憤怒の炎が吹き出た。

炎竜双火 えんりゅうそうか

これの凄いところは、体が炎に成るため一時的な不死になり、体の
炎は、700度になる。

「オラ！！！」

俺は、フェイントに急接近し右手のパンチ、肘うち、踵落としの順に繰り出した。

「やはり、部が悪い。」には、引かせてもうひとつ

消えた。

「あの野郎！！！またか！！！」

ぶちギレ中の俺にスクナが攻撃してきた。

「邪魔だ！！！」

俺は、右手に炎を集め「吹き飛び、爆炎弾 ばくえんдан」「殴つた。

スクナの顔が半分ほど吹き飛んだ。
俺は、炎竜双火を解きいて。

「エヴァ後口ロシク！！！」
電磁迷彩を起動させて逃げた。

「あいつ……最後に面倒事を……！
まあ良い、坊や良くな見とけ……。」

「ありや、エヴァも本気だな」

俺は、石化した詠春の隣で勝手に酒を飲んでいた。

パキヤアアン

「あれが、エヴァの最強魔法……」

「ウッ　ウウウ、なつ！　なぜ剣仁がここにいる？
石化が解けた、詠春が俺を見て、驚いている。

「ふつ、本当に久しぶりだな詠春」

「ええ、いつの間にこちらに来たのですか？」

「教師だから。それよりスクナの封印をしつけ」

「ハハハ、わか「貴様！！　どに居た「なぜ彼女が？」

「ソリで酒を飲んでいた。ついでにエヴァは、俺が連れて來た」

「ハハハ、本当あなたは、ナギと一緒にですね」

「まつりでも良いがな

その後は、俺・詠春・エヴァで酒を飲み合った。

（続く）

只今、旅館の部屋でダウン中の俺。

「ウー、頭が痛い」久しづり友と酒を飲む事で羽目を外した結果がこれだ。

ドガッ

誰かが部屋に入つたようだ。

「行くぞ、けんじ！！」

「何で、エヴァは、平気なんだよー、卑怯だーー！」

俺と同じ量を飲んでも平気なエヴァが入つて来やがった。

「そんな事は、どうでも良いーーー早く支度しろーーー！」

「解ったから、叫ぶなエヴァ」

弱々しく話す。

支度中

「はー、出来たぞ、エヴァ
スーツを着て、出てきた。

「フン、行くぞ、坊や達が待つて居るからな
元氣一杯だな。

「あつ、剣仁先生、エヴァンジョンセントモスハイジニアこまつー。
！」

ネギに会つた。

「おはよつ、ネギ君」いつも道理に話す。

「おそかつたな、坊や早く行くぞ

「あれ、剣仁先生どうしてーーー?
アスナの質問。

「まつ色々な

後ろの奴らから、質問の嵐が来そうだから早めに切り上げた。

詠春発見！！ 早速声をかけると。

「詠春、大丈夫か？」

「ええ、なんとか」

俺と詠春は、昨夜の事を思い出していた。

「なあ、詠春」

「どうしたんだ」「すまん、このかちやんに魔法の事を知られたかも、
知れない」…、大丈夫ですよ。私も、そろそろ、ばれれると思いま
したから」

「もし、このかちやんが魔法を知りたいって言つたら

「教えてあげてください、これは、親友の頼みとして」

「ああ、そうじよつ

「ネギ君達を待たせるのも、悪いですか？早くいってしまじょつ」

「そうだな」

「さあ、二〇の奥です。3階建ての狭い建物ですよ」

「てか、まだ在ったんだあれ」

「ハハハ、在りますよ」

「ねえ、剣仁先生と近衛のお父さんって知り合いかな？」
パルが言つ。

「さあ～、そこまでは？」
長瀬の発言。

「うーんです。どうぞネギ君」

「なあ、詠春、本とか見せて良かつたっけ?」

「平氣です、読めないはずですか?」

「どうですか、ネギ君」

「ハ ハイー!」

「見たい物や、調べたい物がたくさんあります」

「それは、良かつた」

「それよりも…父さんの事を聞いて良いですか」

「教えてやれば、詠春」

「そうですね、IJのか 刹那君 明日菜君にちりくへ

「IJの写真に写つて居るのが、サウザンドマスターの戦友達……黒い服が私で、グレーのスーツを着ているのが「俺だ」と言つてます」

「…………」

「嘘、先生が？」

明日菜発言。

「そりだが、それがどうした？」

「まあ、こんなんだからな、ケンジは」

「エヴァ 先生と言え先生と」

「……、剣仁先生が父と同じ立派な魔法使い」

「あー、立派な魔法使いは、辞めてくれ」

「えつでも「辞めろ」…分かりました」

「てな訳で、詳しい事は、帰つてからな」

「　　「はーい」　　」

「んじや、先に駅に行つてゐるは

その場から離れた。

（続く）

ネギへの試練

「ヒィーー！ エヴァの奴マジカー！！」 後ろから、魔法の射手が飛んできた。

なぜ、砂浜を全力疾走してるかだつて？ それは、修学旅行から帰つて、エヴァの別荘を借りて、体術・魔法の練習をしてると、別荘の持ち主のエヴァが来て

「久々に死合するか」

この一言により、エヴァ、茶々丸、チャチャゼロの三人VS俺一人の戦いとかした。

「ケケケ、待ちヤガレ」

チャチャゼロがククリ投げてきた。

「チャチャゼロ！！ 刃物を投げるな！！」

俺は、即座に銃で撃ち落とす。

「油断大敵です。先生」

背後から茶々丸の蹴りが来たが、銃でそれを受け止めた。

すると、銃にヒビが入った。

「ンナ！！　どんだけ強いんだ！！」

続けて、茶々丸の回し蹴りとチャチャゼロのナイフが飛んできた。

「クソ！！！」

俺は、その攻撃を転がつてかわした。

「ハア！！　150柱」

上空から魔法の射手が飛んできた。

「えっ！！　ちょっと待てーーー！」

俺は、エヴァが放つた、魔法の射手が全弾当たつた。

俺は、茶々丸に怪我の手当てをされながらエヴァに問いかけた。

「なあー、ヒヅア、ネギを弟子にするって本当か?」

「まだ解らん、それに試験の結果による」

「試験?」

「そうだ、茶々丸と格闘戦で、一撃入れれば良いだけだ」

「…まあ、茶々丸に格闘で勝つのは、無理だろー」

「知つてこる、だからケンジ、貴様がネギとやれ、久しぶりに腕がなるだろ」

「そうだな、そろそろネギの実力を知りたいし良い機会か」

「間違つても「殺すな」解つて要ればいい」

「しゃーね、グローブを用意するか

「ボクシングのか?」

「いや、俺が言つたのは、そ「総合格闘のじょ」「…」、茶々丸
俺が言つ事を先に言つな

「すいません、マスターが解らなそだつたので

「まあ良一や、H、H、ネギと戦つて、いつだ？」

「ああ、今夜だ」

「ハァー、早いな、場所は、ど「世界樹の広場だ」解つた
俺は、立ち上がり、別荘から出ていった。

「うひー、早めに寝よう

（夜 直室）

「フア～、よく寝た」

俺は、特殊部隊用の黒の服を着て、グローブをはめた。

「いたぶりに、行きますか

俺は、エヴァの家により、エヴァを呪起こし、連れていった。

先に、広場に来て周りに置いてある物の配置などを確認していると

「剣仁先生何でここにー?」

「やあ、ネギ君

「坊や、今夜戦うのは、茶々丸ではなく、そこにいるケンジが相手だ」

「えつーー。そんな無理ですよーー。」

「ネギ君、いいで諦めるのなら、君は、父親に一生追いかけないよ

「えつ！ ですけど…。」

「君は、父親を越えたいのだろ」

「はーーー。」

「なり、紅き翼の一人と戦つのも、良い経験だ。」

「ですけど…。」

「戦う理由が欲しいのかい何なら、俺がギャラリーを人質にするのもいいな」

「えつ！？」

「一つ言つが、俺を倒さないと君の父親には、追い付けないよ

「……」

「沈黙か、まあ、良いや。 セツセツと付けて殺るよ」

「えつ……！」

「んじゃ、ルールは、変わらず、俺に一撃入れれば良いだけだ」

「…、解りました」

さあどうな、戦い方をするんだネギ君。

「ハア……！」

「うお……！」

ネギは、俺の懷に潜り込もうとしたが、それを、俺は、後ろに下がりながら避けた。

「クッ……まだ……！」

「遅い遅い……！」

ネギは、蹴りを入れようとしたが、俺の蹴りでそれを、止められた。

「ハツ ハツ！！」

「だから、遅い！！」

今度は、殴りに変わった、だが、それすらも、俺は、かわす。

「そろそろ、俺も攻撃するよ ホラ！」

「ガハツ！！」

俺は、防御から攻撃に切り替えて反撃した、まず、右ストレートをネギの腹に一発当てた。

「こんなんじや、終わらないぜーー！」

「クツー！ ガハツ！！」

ボクシングスタイルでネギを殴り続け、防御に隙が出来たら、そこに集中攻撃をして、ネギの胸を殴つた。

「こんなもんか、ネギ 次は、ムエタイでいくぞ」

「 「 「 「 ! ! ? ? 」 」 」

俺の一言で、ネギ、吉、アスナが驚いた。

「どうしたお前ら?、俺がボクシング以外できるのが不思議か

「待つアル!! 先生他に何出来るアルカ?」

「ほんどの格闘技が出来るぞ」

「えつ!!」

「ネギ君 油断大敵だよ!!」

ネギが驚いた瞬間に俺が蹴りを入れて倒した。

「待つて!! 先生!!」

「何だ、アスナ」

「全ての格闘技に通じてるって、卑怯じゃない」

「アスナ、俺は、勝つためには、何でも使うぞ」

「えつ？」

「例えば、お前らを人質にするのも、毒で弱らせるのも、勝つためになら何でもやるぜ」

「卑法もが（マル）」

「卑法もが」

「ウオオオー！…！」 ヤツベ、ネギ 怒ったかも…。

「良いねー、さあ来い」

この攻撃で殺されても立ち上がったなら、合格であるか

強い 強すぎる、僕には、勝てない

なに、この圧倒的な差は

上から、俺、ネギ、アスナの順で内心思った。

「ネギ これで終わりだ！！！」 奥義 石碎き（いわくだき）！・

！・

「グアアアアア！！！」

俺は、奥義の一つ、石碎きの弱い版をネギの腹を殴った。

ネギは、その衝撃と痛みで倒れた。

さあ、立ち上がり ネギ・スプリングフィールド

「ネギ！！！」

アスナがネギに近づけたとしたが

「アスナ、手を出すな」

それを、俺が止めた。

「やつです、アスナちゃん手を出れないでくれー」「徐々に立ち上がる勇気のあるネギ。

「ハハハハ！－！」 合格だ、ネギ・スプリングフィールド
俺は、笑いながら合格を言った。

「えつ！？ なぜ」

「俺の試験は、どんな強敵に倒されても、立ち上がる勇気を試したんだ」

「ケンジ！－！ 貴様！－！」

「良いだろ、エヴァ」

「あ ありがとうございます...」

「んじゃ エヴァ後は、頼んだ」

「待て！！！ ケンジ！！！」

俺は、その場から逃げてると、エヴァの声が響いた。

（続く）

「貴様と言つ奴は！！」

「悪いー」ゼこました

「ふやけるなーーー！」

只今、エヴァーからのキツイ説教中、
何でこうなったかだつて？

理由は、ネギの試験に有るんだ。
まあ、勝手にネギに合格と言つて、逃げたら、次の日にエヴァーに捕
まり、説教を喰らわされ、今にたどり着く。

「なあ、エヴァー本当に悪かつた」

「悪いと思つなら、貴様も坊やの訓練を手伝え！ーー！」

「良いけど

「そつか、なら、ついでに私と仮契約をしろ

「…、それは、出来ない」

「なぜだ!!　まさか、すでに他と仮契約を…。」

「…、それについては、機密のため話せない」

「ホホホ、そう言えば朝倉が真名に恋人が居ると言つていたな」

エヴァは、俺を見たまま言つ。

俺は、エヴァと視線を合わせないように下を見ている。

「ケンジ、汗が凄いぞ」

「ハハ、大丈夫だ」（ヤベー、バレたら死ぬ…。）

「そうだな、朝倉にもっと詳しく聞いて見るか」

「えつ!!　いや、ちょっと待て、言つから!!　朝倉には、聞

くな!!」

（朝倉の場合、俺の事をエヴァから聞き出すよな）

「最初から素直に言えれば良いものお」

「解つた、真名の事を話すが、仮契約は、しないからな」

「まあ、良い話せ」

「真名と仮契約をした」

「…、そつか」

エヴァは、詠唱し始めた。

「待て、エヴァそれは、洒落にならない！…！」

「ならば、私とも契約しろ…！」

「いや
でも」

(ヤバい　ヤバい！…真名にバレたら…死ぬ)

「まあ、良い、茶々丸、用意しろ」

「はい、マスター」

エヴァの後ろで控えていた、茶々丸が動き出した。

「あの、まさかそれって」

俺は、茶々丸が移動した場所を見ると、魔法陣が書かれていた。

「ああ、契約の魔法陣だが」

茶々丸が俺の後に立つた。

「なぜ、茶々丸が後に立つ」

「お前が逃げようとするからな」

すると、茶々丸が手刀を食らわした。

「ウッ！…！」

ドサ

俺は、倒れた。

「さて、茶々丸、ケンジを魔法陣の所まで運べ」

「はい、マスター」

俺を担いで、魔法陣の中に仰向けに置いた。

「ケンジ、覚悟しろーー！」

そう言って、俺にキスした。

5分後

俺は、起きて、エヴァにゲンコツを一発食らわしてから、1時間程説教した。

「エヴァ　俺の仮契約カードは、どこだ」

「知らんが
なぜか、慌て始めた。

「、そつか

俺は、素直に引いた。

「これを見せられんは
俺に聞こえない様に1人呴いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7311/>

異世界にきちまった俺！！

2010年10月9日16時53分発行